

東歌における赤見山について

新 里 宝 三

万葉卷十四の三四七九番歌に安可見夜麻 久左祢可利曾氣 安波須賀倍 安良蘇布伊毛之 安夜爾可奈之毛とある。この歌に出る「安可見夜麻」は何処にあるのか、これにはいろいろの説があるが、それについて次に検討して見たいと思う。

現在、赤見山の所在については、大略左の通り所見が分れている。

- 1 佐野市赤見山である。(岩波日本古典文学大系・万葉集)
 - 2 佐野赤見であるらしい。(井上通泰・万葉集新考、窪田空穂・万葉集評釈)
 - 3 赤城山か、上野赤見峠か。(橋本直香・上野歌解)
 - 4 赤城山か、上野赤見峠(重点)か、佐野市赤見山か。(荒木田楠千代・万葉集上野国歌)
 - 5 上野赤見峠か、佐野市赤見山(重点)か。(田辺幸雄・万葉集東歌)
 - 6 近江明見郷、美濃明見郷、尾張赤見、佐野市赤見(重点)か。(鴻巣盛広・万葉集全釈、沢瀉久孝・万葉集注釈)
- 「安可見夜麻」は万葉集略解にあるように地名であり、そこにあ

る山の名であることには議論の余地がない。そこで赤見山の位置の検討になるが、前述の諸説のうち、否定し易いものから先に挙げよう。まず鴻巣盛広の万葉集全釈によると「安可見山の所在はわからない。明見郷は近江、美濃にあり、赤見は尾張、下野にある。下野のは安蘇郡で、佐野町の西北方に当たっている。東歌としてはこれが最もふさはしい地である。が、果して古名の遺っているものであるか、どうか明らかでない」とある。(同書、二四四八頁)

沢瀉久孝氏の万葉集注釈もこれに近く「安可見山」所在不明、新考には「下野国安蘇郡に赤見郷がある。そこか」とある。東歌としては下野がふさはしいがなお他にもあるかも知れない」といっている。(同書、十四卷一七八頁)

右のように各地の名が挙げられているのは、恐らく吉田東伍の大日本地名辞書の記載によったからであろう。

そこで地名辞書を調べてみると

- 1 近江明見郷―和名抄、野州郡明見郷(安加美) 在南北。○按に明見今詳ならず。河西村大字荒見、玉津村大字赤野井など名称相類すれども、確実ならず。訓註に抛ればアカミとよみ南北の二郷に分れたる地なり。○再按、明見は三宅と訓むべきにやや後世の方言に三宅を明見妙見に訛る例甚多し。然れども和名抄に於て早

く三宅を明に作り、訓を転じて安加美と注したと想はれず。後の考をまつ。三宅とすれば今小津村大字三宅ありて、地理相合ふ。

(上方五二〇頁)

2 美濃明見郷―和名抄、大野郡明見郷。○今詳ならず。木振、寺内などの辺にやとおもはるるも徴証なし。又は其西の豊木村、西郷などにやや明見の地名も他に見ぬ字面也。(東国二二八〇頁)

3 尾張赤見―丹羽郡、今丹波と合同し、赤羽の新名を立つ。織田彈正左衛門尉勝久の孫を赤見左衛門信久というは、此に居れる也。(名所図会、尾張志) 赤見の東なる西大海道、定水寺は今穂波村と改む。此に式内宅美神社存す(神祇志料)
以上のように出ているが、たとえ現地に赴いたところで、適確な資料はつかみ得ないであろうし、この歌に關係のある山名も見当らないものと考えられる。

二

そうなる問題には赤見山の所在地を下野か、上野かにもつてきて検討しなければならぬが、最初に赤城山説を眺めてみよう。

荒木田楠千代の万葉集上野国歌(煥乎堂発行)の説をあげると、次のようである。

安可見夜麻は上野歌解に勢多郡赤城山か、或は利根郡桃野村より吾妻郡中山宿へ越える赤見峠かといへり。思うに後者か。又別に下野国安蘇郡にも赤見村あり。(一五頁)

これは、橋本直香の上野歌解を基礎にしたものであることは明瞭である。赤城山は明治四十三年版群馬県案内によると、勢多郡富士見村―郡の北嶺の総称にして、利根郡の陽を蔽う。山頂数峯に分れ大黒檜峰は北に大黒檜峰は東に云々(一七五頁)とあり、上毛三山の一で固定忠治のたてこもった山として有名であ

るが、赤見と称した記録も見当らないし、アカミがアカギに転訛したとも考えられない。また万葉では「上毛野久路保の嶺」と呼んで、黒檜―久路保(豊田八千代の上州の山々―万葉講座六卷月報一〇頁)とした見方もあり、いずれにせよ、赤城―赤見説は考えられない。

兎角、上野歌解なり万葉集上野国歌には、無理な解釈があるが、出版が早かっただけに、これに惑わされるものも多いようである。例えば、安蘇は群馬県北甘楽郡宇田村朝岡であるとか、榛名の一峰相馬の事であるとしたり佐野山が八幡村であるとか言った具合で、何でも上野地内になければならぬような偏見がつきまわっているようである。

次に群馬県赤見峠のことであるが、あまり世間的には知られていない所である。日本地理風俗大系にも前記群馬県案内にも盛文館の群馬県地図(二十七万分の一)にも、その他十種類ばかりの群馬県名所案内書を見たが見当らない。そこで吉田東伍の地名辞書を翻いたら

吾妻郡中山―名跡志云、武蔵七堂系図に阿佐美庄五郎弘方領内の内、上野国吾妻郡中山村とあるは今の群馬郡中山宿也。

とあるので、アサミ―アカミの縁も考えられるし、また別に山が紅葉した状態から赤見峠と称したことも考えられないこともない。

なお赤見峠が郡境九六七・九メートルの所と言えは相当高い所で「庶民的な恋愛場所」の觀念からは離れ、田辺幸雄の万葉集東歌に部落共同での草刈場の奥まった所での相思の二人、これを黙認する空気が歌謡としてはやらせた強烈な山野のにおい―昼間のふりそそぐ陽光の下での状態で野人たちの健康な性欲の讃歌(同書・一七六頁)

とあるのとはかなり距離のあるものとなつてくる。つまり山が人里

を離れて高度を増せば、寧ろ神秘さが加わって、無計画なデパートではあり得なくなる。この赤見峠をとらない理由の一つでもある。また別に赤見峠の見える麓のできごととすればおのずから考え方も変わってくるが。

岩波の日本古典文学大系本万葉集ではあっさりとして

赤見山―栃木県佐野市赤見の山(三巻四三七頁)

と注しており、鴻巣盛広の万葉集全釈の説は前述の通りであり、

(二四四八頁)窪田空穂は、

新考は下野の国安蘇郡赤見郷がある。そこか。(万葉集評釈十卷一二〇頁)

と言って逃がっている。田辺幸雄は万葉東歌で

アカミ山の候補地は群馬県吾妻郡高山村の北端九六七・九メートルの山―中之条市の東北三里―と栃木県佐野市の西北方にある赤見部落の附近の山、と二つあるが、この歌の条件としては後者に有利なものがあり文献的には一五九〇年までさかのぼれる程度だが下毛野三嶋の山(三四二四)近く安蘇の河原(三四二五)も遠くはなくてはまず候補地として有力であるといつてもよい。(同書・一九五頁)

と言っている。文中高山村とあるのは、前記赤見峠を指し、一五九〇年とあるのは、天正十八年頃で下野赤見では赤見大門音頭の始まった頃であり、龍江院の木造貨狄像の作成された頃であるが、正確な古文書式な文献としてはそんな所であろう。では佐野市の赤見とは一体どんな所か。

三

赤見の地域を歴史的に眺めると

1 和名抄によれば、下野国が九郡に分れ、うち安蘇郡が安蘇、

説多、意部、麻績の四郷に分れた。赤見は麻績郷に属し、麻績の地名は今、小見部落として残っている。

2 藤原秀郷の莊園となった佐野庄は、西は赤見山、東は唐沢山、北は足尾山系に入り、南は渡良瀬川で仕切られ、旧安蘇郡以外に下都賀郡小野寺村三嶋村、足利郡富田村吾妻村が含まれた。(篠崎源三氏佐野庄一頁)この地に赤見城の築城されたのは治承二年(一一七八年)で、後秀吉の時代入道天徳寺了伯の拠った所である。

3 今赤見村と言ひ、寺久保、出流原、石塚、小中等を合す。国志云、安蘇郡小中に入麻呂明神の祠あり。山形村出流原村にも祀りてあれどいつ頃何人の祀初めじか知り難し。(吉田東伍・地名辞書、三四〇六頁)

4 現在の佐野市は旧佐野町の外に赤見、堀米、犬伏、植野、旗川等の町村を合併している。

5 赤見山は赤見町すぐの裏山で、六箇許りの丘陵地群からなり、最高が一一三・七メートル、今は雑木林が多い。中山、東山などとわけても呼んでいる。

次に赤見周辺の環境を眺めることばしよう。

奈良時代以前には考古学上有名な葛生原入(八十万年前か、早大考古学研究室調査)や象の歯、犀の脚の出土した葛生町が近くにあることや、堀米地区水田に堅穴式住居跡(前沢輝政氏試掘)があり、弥生式土器の出土の多いこと。出流原弁天池(周囲一三八メートル、県天然記念物)が原始時代から地下水の湧出で有名であったこと。前方後円型の米山古墳(東西の長さ三三六・三三メートル、高さ一三九・九九メートル)二段方墳の大柁古墳(下段の底部径二一六・三六メートル)その他の古墳から人体や遺品の出たこと、古代としては比較的文化に恵まれていたことがわかる。

奈良朝時代を中心としては万葉の三嶋山（赤見から約八〇〇〇メートル）や安蘇の河原（赤見から約四〇〇〇メートル）並びにつづら藤（万葉、三四三四番歌所出）産出の唐沢山（赤見から約五〇〇〇メートル）があること。赤見山裾から一〇〇〇メートル位の所に市の沢古噴（円噴）群十三基があって、六世紀から八世紀初め（大化から延暦頃）にわたって豪族のおった所で、ここは博物館鑑査官高橋勇氏等が発掘している。（佐野教委会編「佐野市の文化財」参照）また赤見地区旗川流域（一、五〇〇メートル位離れた所）に出土品が多く記念碑が建てられていること、地統きの出流原古噴からは人面杷手の壺や埴輪類が出ていることも参考になるし、三嶋山麓には国分寺瓦の窯場跡がある。

なお此処で一考したいのは人丸神社とつづら藤のことである。神社名鑑に柿本人麻呂曾て此地に遊びたる事あり。里人の信仰により石見国高角山より天慶元年に勧請す。人麻呂この地に遊びしときの歌

しもつけの安蘇野の原のささあけに
もやかけ渡るつづらくさかな

と伝えられている。（同書・一四〇頁）

とあるが、人麻呂の訪れたことの真偽は分らないとしても、人麻呂がこの地で信仰されたことは赤見、山形、小中、三嶋等各地に人麻呂神社のあることでも知られる。

四

最後に赤見の赤の色彩について一言しよう。土地の古老は、秋になると赤見山が黄華して佐野方面から眺めると赤く見えるそれで赤見と称したと言っているが、今では雑木林が主体でそれに常緑樹が交っている。そして紅葉の程度は栃木県北塩原や鬼怒川のように寒



冷度が高く鮮紅色を呈するものとは違って、黄の強い褐色黄葉である。それが安蘇山系の青紫色をバックに黄葉の赤見山が前景となるとき、いかにも色彩が鮮明で「赤見」の名にふさわしい実感が湧いてくる。

奈良朝時代には唐制の影響を受けて服装なども黄、紅、赤、濃き色等の区別（松岡映丘「色彩に関する講話」一二頁）も出来たが、一般人は朱も褐色も皆「赤」の通称で呼んだ。万葉四二六六番の長歌に「安可流橋」とあるが、佐佐木信綱の新訓万葉集では「熟る橋」とし、鴻巣盛広の万葉集全釈では「黄熟る橋」と訓じている例もある。

以上種々の考察を試みたのであるが、結論を言えば、東歌における赤見山は佐野市赤見町にある山と断定したのである。